

研修名 保健衛生 安全対策

平成29年11月24日(金) 13:30~16:00

講演 「子どもの安全から保育の質を考える」

講師 ジャーナリスト 猪熊 弘子 氏

1 講演要旨 子どもの「いのち」を守る保育
～保育事故防止と子どもの発達保障の両立を目指して～

1) 「死を招いた保育」が教えてくれたこと

①『死を招いた保育』＝「上尾保育所事件」とは？

2005年8月埼玉県上尾市にある市立上尾保育所で4歳男児が園舎内の本棚の下の引き戸に入り込み、熱中症で死亡した事件。

②「日常の保育」に問題があった。

2) 「保育事故」に対する基本的な考え方

①重大事故で失われる「命」と「信頼」

②「事故は起こるもの」ではなく、「起こさないようにするもの」

③子どもが重篤な状態になるまでわずか「4分」しかない。

④園内で同じような事故が繰り返されている。

3) 「保育施設」での死亡事故の現状

★もっとも気をつけたいのは「くう ねる みずあそび」＝寝ているとき、ごはんを食べているとき、水あそびしているときが保育の中で一番危険な時間。

★どのようにすれば、安全な保育ができる？

①ねる＝0，1歳児＝睡眠中の事故

・「うつ伏せ寝」は絶対に避ける。

・表情が見えるように明るい部屋で寝かせ、呼吸チェックを確実に行う。

②くう＝1～2歳児＝食事中の事故

・「食べること＝危険！」という共通認識を職員全体で持つこと。

・子どもの嚥下発達をきちんと把握すること。

・きちんと飲み込んでいるかどうかをしっかりと見る。急いで食べさせない。

※アレルギーの危険についても対処する。＝誤飲のないよう目で見える工夫を。

③みずあそび＝主に3歳以上＝水の事故

・10cmの深さの水でも子どもは溺れる。静かに溺れる。

・プールには必ず監視する人をおく。

- ・お泊り保育、園外保育の際の「下見」の重要性。
- ④「治療に1ヵ月以上かかるケガ」への対策
 - 《多いケガ》1. 骨折 2. 歯、歯の脱臼 3. けいれん
 - 《ケガの多い遊具》1. 滑り台 2. 雲梯 3. ブランコ
 - 《課題》1. 保育者の配置（保育者1名の時に多い）
 - 2. 保育内容の見直し
- ⑤今後、安全面で心配になってくる可能性が高い案件
 - 1. 感染症 2. 発達の遅れのある子ども 3. アレルギーのある子ども
- 4)「組織」が事故を引き起こす。～職員が自ら考え、動くこと、動ける環境に！
 - ①コンプライアンス（法令遵守）とガバナンス（組織の正当な運営）に問題のある園で重大な事故が起きている。
 - ②自園の「常識」を疑おう。思い込み、怠慢、無視から死亡事故が起きる。
- 5) 良い保育の実践と安全の両立のために考えたいこと
 - ①「禁止」の保育ではなく、子どもの発達を保障する保育へ！
ただし、安全確保は大前提として必須。
 - ②<いのち>を大切にすることとは、<子ども一人ひとりの存在>を大切にすること。「良い保育」の実践が、おのずと子どもの命を守ることにつながる。
 - ③保育は「人間同士の営み」→人間同士の関わり合いの中で、いかに子どもたちを愛情深く育てていくか。
 - ④“あたりまえのことを、並外れた愛を持っておこないなさい（マザーテレサの言葉）
地味だけれど必要な小さなことを確実にくりかえし、積み重ねていく。

2 感想

上尾市の事件の詳細を聞き、何と云っていいか、胸が苦しくなる思いでした。日常の保育の問題や職員関係、保護者同士の関係の悪さにより、事故が起こるとは本当に怖くなりました。「あと4分！」という状況にならないように、普段から職場の人間関係、信頼関係を築き、自ら考え、動けるようになりたいと思いました。そして、子ども一人ひとりのいのちや存在を大切にし、丁寧に対応する保育を目指したいです。

(記録 青谷保育園 吉川 小百合)